

## 「このとりのゆりかご」を必要としない社会に

「このとりのゆりかご」は遺棄される赤ちゃんの命を救うため、熊本市の慈恵病院に2007年5月10日に開設された。私は、運用開始から2015年3月に退職するまで関わってきた。

当時「赤ちゃんポスト」とセンサーショナルに報じられ、「尊い命が救われる」「捨て子を助長する」「育児放棄」などと世間では賛否両論の声が聞かれた。しかし、直接運用に関わる中、遺棄されたかもしれない、虐待死させられたかもしれない尊い赤ちゃんの命を救え、女性を罪から救うことができ「良かった」と実感している。そのことは、『はい。赤ちゃん相談室、田尻です。』（ミネルヴァ書房、2016年9月発行）にまとめたので、読んでくださった多くの方に正しく理解していただけたと思っている。

ゆりかごと同時に開始した電話相談「SOS 赤ちゃんとお母さんの相談窓口」には、子ども

(最少年齢は小学5年生)や学生など、未熟だが将来のある若者からの相談が多くあり、苦悩しながら対応せざるを得ない現実がある。そこには生活能力がない若者たちが、誰にも相談できず、深刻な悩みを一人で抱えている姿がある。

相談内容で多いのは、「妊娠・避妊に関する相談」43%、次いで「思いがけない妊娠」25%である。「思いがけない妊娠」に関しては「未婚の妊娠」が圧倒的に多く、「若年妊娠」「不倫」「夫やパートナーの出産に対する反対」と続く。妊娠に関して、なぜ、常に女性だけがつらい思いをし、責められなければならないのか、8年間、ゆりかごに関わる中で実感した。

私が、退職後も「スタディライフ熊本」で引き続き相談窓口を開設し、社会的に弱い女性の悲痛な声に耳を傾け続けているのは、「この



たじり ゆきこ  
田尻 由貴子  
一般社団法人スタディライフ熊本

とりのゆりかご」を利用せざるを得ない人がいることを責めるのではなく、「このとりのゆりかご」を必要としない社会を目指すという思いがあるからだ。

そのために「スタディライフ熊本」では、子ども達へ命の大切さを伝える活動や、2015年11月からは、私が校長となり「胎教スクール」を開設している。胎教スクールは、安産、総合育児、日本文化、感性論哲学、食育、絵本セラピー、胎教音楽、マタニティアロマ、メイクアップ、歯科保健などを習得する教室である。未来の社会を担う子どもを一人の人間として育てていける親育ての教室でもある。更に、女性として母としての教養を確立し、いのちと真摯に向き合う時間の素晴らしさを感じながら、成長できる学びの場として、女性が輝くための支援をしている。

## 人コーナー

### テーマ 「問い続けることを止めない」

やすだ なつき  
安田 菜津紀 (フォトジャーナリスト)

今でも鮮明に覚えている。渡航中だったカンボジアで、宿のテレビを急いでつけた。「日本人の女性ジャーナリスト、シリアで死亡」とBBCが大きく報じていた。画面の前で愕然とした。山本美香さんには生前一度だけお会いしたことがあった。優しくも、力強いその視線は、今でも脳裏に焼きついている。

本書では美香さんの取材の軌跡を写真で追いながら、そのまなざしの向こうに広がっていた世界を探っている。子どもたち、女性たちへと、美香さんの視線は常に、社会の中で最も声をあげられない立場にある人々に向けられている。

彼女が銃弾に倒れたアレppoという街を、私も一度、訪れたことがある。歴史深く、温かな人々の輪が広がる素晴らしい街だった。あの時誰かが、数年後にこの街で殺戮が繰り返され、廃墟と化すことを想

像できたのだろうか。

日本ではジャーナリストの命が失われるたびに、「なぜ危険地に行くのか」と問われる。けれどもそれはときに、「なぜその地のことを知る必要があるのか」という声につながりかねないかもしれない。唐げられ続ける人々に向けられる最も過酷な暴力とは、人々がその存在にすら背を向けることではないだろうか。

美香さんが亡くなった後もなお、シリアで、世界の至るところで、戦禍は人々を飲み込み続けている。この本に収められた写真一枚、一枚が、時を超えて語りかけてくる。今、私たちに出来ることは何か。問い続けることを止めてはいけない、と。



- これから戦場に向かいます
- 山本 美香 写真/文
- ポプラ社
- 2016年初版
- 1,600円(税別)

# Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

ジェンダー問題解決の  
カギを提示する  
最前線書誌情報誌



## 男女交際の衰退に直面する日本



やまだ まさひろ  
山田 昌弘  
中央大学文学部教授

日本では、結婚が少なくなっているだけでなく、男女交際自体が減少している。それだけではなく、男女交際意欲、性的関係をもちたいという意欲も低下している。

昨年、国立社会保障・人口問題研究所から、2015年に実施された「第15回出生動向基本調査」の結果が発表され、男女交際に関する調査結果に注目が集まった。それは、交際相手をもたない人の割合が著しく高くなったからである。1992年の調査では、交際している異性がない未婚者(18-34歳)は、男性47.3%、女性38.9%だったのが、今回調査では男性69.8%、女性59.1%へと増えている。更に、全体の中で男性30.2%、女性25.9%の未婚者が、交際を特に望んでいないのだ。また、性体験をもたない未婚者も、25歳未満で著しく上昇している。他のいくつかの調査でも、男女交際意欲の低下、性欲の低下が観察されている。

そして、メディアでもドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』(TBS)がヒットし、「恋愛しないで結婚」というストーリーが若者の共感を集めている。

今から60年くらい前は、多くの人は恋愛にあこがれながら、見合いで結婚していった(1952年、見合い53.9%、恋愛33.1%)。30年前、恋愛結婚が当たり前になったバブル経済期は、むしろ結婚せずに恋愛を楽しむことがトレンドとされ、『男女7人夏物語』や『東京ラブストーリー』などのドラマが人気を集めた。そして、現在、恋愛せずに結婚することを望む若者たちが増えているのである。

恋愛不活発の原因に関しては、様々な要因が取りざたさ

れている。内閣府の「結婚・家族形成に関する意識調査」(2015年)では、恋人が欲しくないと答えた人の中では、「恋愛が面倒」という回答が46.2%と最も多かった。若い人の話を聞くと、結婚しない相手との恋愛は時間の無駄(女性)、お金の無駄(男性)という意見が聞かれた。

気になる人がいても、断られるのが嫌だから、声をかけないという意見もみられた。断られると自分が傷つくだけではなく、SNS等で噂が広がる。それがいやだそう。未だ、日本では、男性から声をかけて交際が始まるのが一般的である。この領域では、まだジェンダー差が大きいのだ。その中で、男性が誘わなければ、恋愛は始まらないのである。

女性はいいい男が誘ってこないと嘆き、男性は自信がなくて声をかけるのを諦める。そんな社会に日本はなってしまったようだ。

その結果、恋愛感情は、より安全な疑似恋愛に向かう。2010年の内閣府調査によると、交際経験がない未婚女性の約3割はアイドルやスターに恋をすると回答していた。彼らは、身近な男性よりもかっこいいに違いない。男性は、アイドルやキャバクラ、メイドカフェに向かう。世界の中で、日本ほど性的サービス業が発達した国はない。

私がちょうど10年前に「婚活」を提唱したのは、出会いを増やせば、好きな人ができて恋愛結婚が増える、つまり、男女交際活発化による結婚の増大を目指したのだが、現実とは逆の方向に進んでいるようだ。